[1]

†

チャルノ川へ面した古い倉庫街を照らすのは、月の光と、水面に反射したその破片だけだった。湿度の高い夜の闇には埃と黴、そして海から上ってきた微かな潮の香りが混ざっている。とぷり、とぷりと護岸に打ちつける音は、巨大な両生類が唾液の溜まった口を開け閉めするかのよう。

暗幕のように分厚い夜のしじまを震わせたのは、水平二気筒のドロドロとしたエンジン音と、男たちの甲高い声。サイドカーつきのモーターサイクルたちが、微睡んでいた闇の精霊たちを蹴散らしていく。

若者たちだった。十人以上いたが、一番年かさの者でも、おそらく二十歳ほどだろう。皆一様に油紋が浮いたようなギラついた目をしており、それは興奮に濡れたものだった。

馴染みの廃倉庫前に車を停めると、エンジンキーを回す暇さえ惜しむように中へ駆け込んだ。壊れかけた電球が一斉に灯ると、抜けた天井から注いでいた月光をかき消した。

男たちは引きつった笑みを浮かべながら、材木を組み合わせただけの粗末な机の上に今日の一戦利品《・・・》を積み上げた。

「これ一つで二万エレクト（日本円で約六十万円）は稼げるぞ……！」

山積みになったズタ袋の中に入っていたのは、煤のような色をした細かい枯れ草だった。独特な臭いがするそれは、幻覚剤の材料に使われる一種である。

「アイツら、こんなに隠し持っているなんて」

男たちはつい一時間ほど前まで、ヴィネダ郊外まで遠征に出ていた。目的地は、中央アメリカ系移民のコロニーである。

幻覚剤を含む強力な向精神薬の類は、ルギニア国内でも当然規制の対象となっている。一方で、魔術目的での所持と利用については文化保護の観点から規制が緩くなっており、それは、この国が「魔術師たちのカナン」などと揶揄される要因の一つでもあった。

男たちが狙ったのは、そうした規制から見逃された一団だった。クスリを譲り受けた方法については、言うまでもない。

「でもいいのかよ、ヨシフ。伯父貴にも言ってないんだろ？」

一人が不安げに聞いた。ヨシフとは、どうやらリーダー格の男の名らしい。

「構やしねぇよ」ヨシフ――ひときわガタイの大きい、熊のような男だった――が、椅子へ身を投げながら言った。「いつまでも使い走りなんかやってられねぇ。お前たちだってそうだろ？」

リーダーの不敵な笑みを見て、男たちも自らの腹の奥に火が灯るのを感じた。野心や、期待の熱がはらわたを登ってくるのを感じて、くつくつと喉が鳴った。

「そうだ！　俺達ならやれるぜ、ヨシフ！」

「パーっとやろうぜ、今夜は！　チームの新たな一歩を祝うために！」

「オイオイ、少しは金、残しておけよ。これからの軍資金にもなるんだからな」

ヨシフははしゃぐ部下たちを嗜めたが、その声色に棘は無かった。彼自身、今の状況に浮かれていたのだ。寛大な君主として、下卑た単語が何度も浮かんでは消える饗宴の様子を見守っていた。

そんな時だった。

「ヨシフ！」狂乱に熱した空気に水を差したのは、倉庫の前で見張り番をしていた男だった。「変なヤツがいたぞ」

見張り番が乱暴に突き出したのは、一人のみすぼらしい少年だった。

背丈はそれなりにあるが、顔立ちの幼さから見て十五、六歳ほどだろう。灰色がかった乱雑な髪に、擦り切れそうなほどにくたびれたミリタリーパーカーを羽織っていた。

歓楽的な雰囲気が一転した。男たちは一様に押し黙ると、懐に隠していた凶器を弄《まさぐ》った。滲み出す怒気には、地鳴りのような低い音を幻聴させる凄みがあった。だがそれは、張り詰める緊張感の裏返しでもあった。

ヨシフが無言で立ち上がった。長い脚が机に当たり、空虚な音がこだまする。カタギの人間ならば、今の音だけで竦みあがっただろう。

「武器は――持っていないみたいだ」

見張り番が、少年の身体中を手のひらで叩きながら言った。

「こんな時間に何してるんだ、ボウズ？」

五歳も変わらないだろうに、ヨシフは少年にそう呼びかけた。

「迷い込んだのか、俺達の仲間になりたいのか、それとも――」少年の前髪を鷲掴み、ぐじゃぐしゃと頭皮ごと指圧する。「――だれかから指示されたのか」

リーダーの言葉に、男たちの緊張が一段と張り詰めた。だがそれとは対象的に、当事者である少年の表情に変わりはない。生気の抜けた瞳で、しかし針のように鋭い視線で眼の前のギャングを見据えている。

「大したタマだ。……いや、もしかしてクスリでもキメてるのか？」ヨシフは身を屈めると、少年の視線に真正面から受けて立ち、言った。「にしても……ムカつく目つきだな」

瞬間、稲妻のような音が周囲を奔った。

ギャングたちは、ヨシフが平手を打った音だと思った。ヨシフはそういう男であることを彼らは知っていた。

しかし――態勢を崩したのは、ヨシフのほうだった。

硬い地面に両膝をつき、そのまま少年の靴を舐めるように倒れ伏したのだ。

「……!?」

男たちは、リーダーと少年を交互に見比べた。確かに、倒れているのはヨシフだ。少年は未だ微動だにしない。ただ、哀れみに似た視線を地へ向けている。

「魔術師だ……！」

誰かの言葉で、男たちは散り散りに走りだした。廃倉庫の壁は虫に食われた布のように穴だらけで、どこからでも出ることができた。

逃げる男たちの耳に、また雷鳴が届いた。少年の背後に居た倉庫番が倒れた音だった。

「クソ！　アイツらが護衛を雇っていたなんて聞いてないぞ！」

一人が叫んだ。誰に言うわけではなかったが、闇の中で自分とともに走っているであろう仲間が答えた。

「いや、だったら襲ったときになんで出てこなかったんだ!?　もしかしてほかの組の奴らが嗅ぎつけて……！」
またしても|音《・》が二度、さらに続けざまに何度か轟いた。男たちの脳裏に焼き付いたリーダーの姿が、否応なく蘇ってくる。
「クソ、クソ、クソ！　まさか伯父貴が――」
雷鳴。そして人が倒れる音。
断末魔を上げる暇もなく、一人、また一人。
夜の倉庫街は暗い森のようだった。街から遠く、闇と危険に満ちた森。男たちは己を、この森に住む獣だと思っていた。残忍で精気に満ちた|獣《けだもの》だと。
だが森には、上位捕食者が居るものだ。
あれは、少年の皮を被った狼だ。
「こっちから迎え撃つ！　ぶっ殺してやる!!」
闇の中で数人が足を止めた。この野太い声は副リーダーのサムイルのものだ。確かヤツは拳銃を持っていた。
何人かが呼応した。各々取り出した肉厚なナイフの刃が、月光を浴びて鈍く光った。
倉庫街には木造の小屋が不揃いに立ち並び、積み上がった荷物の山も多い。隠れることのできる死角はいくらでもある。
月明かりの下、サムイル筆頭に四人が小屋の角や荷山の後ろに隠れた。
一際大きい雷鳴が聞こえた。
近い。
男たちが固唾を呑むなかで、少年は現れた。警戒する素振りもなく、わずかに早足でやってくる。右手には麻袋。だれかがどさくさに紛れて持ち去ろうとした薬物を回収したのだろう。
――やはり、目的はあのクスリか。
男たちは「美味い話」を持ち込んできたリーダーを恨んだ。
その時、少年は不意に左手を振るった。轟音とともに、手元から光が迸った。間を置かず、何かが倒れ込む音。建物の角で待ち構えていた一人が倒れ伏したものだと全員が直感した。
比喩ではなく、あの音は本当に雷鳴だったのだ。一瞬で空間を駆け抜ける電撃――それがあの少年の魔術か。
いや、問題はそんなことではない。
男たちの頭が冷えていく。
――なぜ、隠れているのが分かった？
「あああああああああ――！」
ヤケクソになった一人が、少年に背後から迫った。しかし、少年は一瞥をくれることもなく、ただ先程と同様に左手を振るうだけでそれをいなす。
雷鳴。
男が倒れ、ナイフが地を滑っていく。
それを見たサムイルは、強烈な悪寒に震えた。いくつかの修羅場をくぐってきた彼には分かる。これは、睨めつけれたときに感じるものだ。
「どこかに少年《そいつ》のグルが居る！　どこかから俺達を|監視《・・》していて――」サムイルは脳天に、血液が集中するような凝り《・・》を感じた「上だ……！」

叫びながら、夜空を仰いだ。星と地上のあいだに向けて銃を撃った。
しかし――何も居ない。あるのは遠く月と星だけ。銃声は闇の中へ吸い込まれていく。何かが逃げていくそぶりもない。いや、そんなはずはない。この視線は、明らかに――。
「は――」
視線を戻すと、眼の前に少年が居た。
周りには男たちが倒れている。もう、自分しか残っていなかった。
銃声が響くより早く、雷鳴が轟いた。

――――。

「コレで全員か」
倒れた男の手から銃を抜き取ると、少年は呟いた。独り言――ではなかった。
「周りには誰も居ないわ」
少年の耳元で、女の声がした。だが、倒れ伏した男たち以外に姿は無い。
「クスリを回収して終わりましょう。……お疲れ様」
少年は小さく頷くと、男たちに背を向け闇へ消えていった。

†

男は、眉間に寄った皺を隠すように眼鏡の位置を直した。レンズの定位置に収まった青い瞳には、炎に似た怒気が滲んでいる。スクエア型の銀縁が、厳格な顔の印象をいっそう強調していた。
「周辺に十三名、いずれも焼死です」
駆け寄ってきた黒服が、耳打つように報告した。バインダーに挟んだメモへ視線を落としながら、報告を続ける。
「身元が確認できたのは一名のみ。奇跡的に財布の中の身分証が燃え残っていました。"ヨシフ・ヴァシリヴィチ・サハロフ"、二〇歳……まだ若いですね」
「ええ。……こんな死に方をするには、あまりにも」
珍しく感傷的な言い方をした若い上司へ黒服は少し驚いたような目を向けたが、すぐに苦々しい表情で同意した。無理のないことだ。「こんな死に方《・・・・・・》ならば。
「あちらには、銃を撃った形跡がありました。被害者のもの、ですが。――火元の確認は？」
「それが……」黒服は現場をもう一度振り返りながら言い淀むと、言葉を絞り出した。「火災の痕跡はどこにも見当たりませんでした。あるのは……真っ黒になった焼死体だけです」
「魔術師による犯行、ですか……」
ため息をつきながら、ヴィネダ州警察中央署のミハウ・クラウチク刑事は現場を見渡した。
――ヴィネダ第十三東港湾区。
歴史的な港町であるヴィネダからチャルノ川を挟んで対岸、東港湾区の十一番以降の区域は通称「ノヴァ・ヴィネダ」と呼ばれ、二〇世紀後半から開発が進んだ、その名の通り新しい区域である。

急成長した港は国内外から様々なヒトとモノを集めたが、それと同時に、都市という器に少なからず歪みを生み出した。特に犯罪率の高さは対岸の倍以上であり、また|この国《ルギニア連邦》では魔術師による犯罪が警察を悩ませていた。
「通して！　息子がここに来ているはずなの！」
キンキンと響く女の声が、現場に居た全員の重い頭を叩いた。見れば、規制が張られた倉庫街の入口から、中年の女が警官の制止を振り切って入り込もうとしている。髪の黄色い、小太りの女だった。
「……私が行きます。君たちは捜査の続きを」
無言で持ち場へ戻る捜査官たちを背にクラウチクは声の主の方へ向かうと、愛想笑いを取り繕う気すらない、死人のような顔で女へ尋ねた。
「どうかされましたか、奥さん」
「刑事さん！　アンドレイ――私の息子が帰っていないの」巻き舌の強い発音に、クラウチクは僅かに眉を顰めた。「あの子、毎夜悪い友達とこのあたりにたむろしていて……きっと昨晩もここへ来たはずなのよ！」
「お名前は？　息子さんと、それと貴女の」
クラウチクは、何度か綴りを聞き直しながらメモに名前を書きつけた。慣れないその発音は、おそらく旧ロシア連邦かその辺りからの移民であろう。息子の年齢は十七歳……。だとしたら、
「悪い友達」というのもだいたい見当がつく。
――ロシアン・マフィアの構成員……いや、末端の不良少年たちと言ったところか。
クラウチクは、唯一身元が判明していた焼死体のことを思い出し、そして眼の前の女に憐れみの視線を向けた。
「……身元確認にご協力いただければと思うのですが」
「身元確認……？」
クラウチクの言葉に、アンドレイの母親は青くなった。
遺体は、使われなくなって久しい倉庫の前に並べられていた。皆一様に皮膚も衣類も判別がつかないほどに黒く縮み上がり、うずくまるように手足を屈めている。まるで、まどろみの中でぐずる幼子のような態勢だった。
その大きな幼子たちの顔を、母親は吐き気をこらえながら一つ一つ見て回った。事件の詳細は聞かなかった。何よりもまず大切なのは、息子がここにいるのかどうかを確かめることだったから。
だが、七人目の遺体の前に立った時、母親が膝を落とした。
「おお、おお……！」
傍目にはもはや顔の分別などつかなかったが、母親には分かったらしい。接吻するかのように死体へ顔を寄せる女を、止める者は誰も居なかった。
「アンドレイ……アンドリューシャ……。刑事さん……どうしてこんなことに……」
クラウチクは、求められた答えとは違うことを承知しながら説明を切り出した。
「周囲に火災の痕跡がないこと、また、燃料を継続的に投下した様子が無いにも関わらず人体が炭化するほどの火力から、魔術によるものと考えられます」
「こちらの子と……それから、この子も見覚えがあります。よく、家の前に来ていたから……」
「それは、例の――」

「悪い友達」と口に出す前に母親は肯定し、また、同じ東スラヴ系移民が多く居住する街区に住む少年たちだ、と答えた。
少年達の素性については、クラウチクの予想が的中したようだった。
同時、捜査員の一人がクラウチクに耳打ちした。身分証の見つかった"ヨシフ"について知っている警官が居たという。つまり、これまでに何度も補導や逮捕をされている彼を覚えていたのだ。
「なるほど……」
クラウチクは、一つの情景を思い浮かべた。
――不良少年たちが非行を繰り返す間に、何者かの虎の尾を踏んでしまう。そして、マフィアの子飼いである魔術師によって、見せしめとも思える残酷な方法で私刑に処された……。ありえる話だ。
「刑事さん」
クラウチクの思考を、母親の低い呼びかけが遮った。涙によるものか、あるいは、怒りによるものだっただろうか、その声は震えていた。
「必ず捕まえてください。犯人を……息子を殺した魔術師を……！」
母親の放つ、ぐらぐらと煮える湯のような声を聞いて、クラウチクは辟易した。当然の願いに、しかし自分が応えられないであろうことに。そして、それが自らの無能によるものではないことに。
「奥さん」クラウチク刑事の声は、感情とは裏腹に淡々としていた。「最前は尽くしましょう。おそらくこの事件には、アンドレイさんが関わっていたロシアン・マフィアの影がある。しかし、実行犯の魔術師については……諦めてください」
警察らしからぬ言葉に、アンドレイの母親は当惑して言葉を失った。
「ルギニアへ移住してどれぐらいになりますか？」
不意な質問に、母親はさらに戸惑った。
「……？　一年半ほど、ですが……」
「であれば、覚えておいたほうがよろしい。――州警察《我々》を含めた国内の警察組織に、魔術師を捕まえることは難しいのです」
母親は刑事の言葉を上手く理解できずしばし反芻したが、やがて荒い息遣いで声を荒げた。
「ど、どういうことなのッ!?　だって、こんな残酷なこと――」
「例えば――」クラウチクは無表情で眼鏡の位置を直しながら話しを遮った。「貴女が人形を使って誰かを呪ったとしましょう。呪った相手は病気にかかり、間もなく死んでしまった。あるいは、不慮の事故で亡くなったかもしれない。この時、警察は貴女を捕まえることができるだろうか」
母親は、話の意図を察しつつも怪訝な貌で刑事を凝視していた。
「もちろん、できない。貴女の呪い人形と、被害者――この言葉を使うのが適切かは分からないが――を結びつけるものはない。呪い人形に被害者の髪や爪が入っているかもしれないが、あるいは、貴女は被害者に強い恨みを持っているかもしれないが……それでも人形は凶器と認められないのだから」
「だとしても、それとこの事件とは全く違うでしょう!?　この子たちは……私の息子はこんな姿になって――」

「ええ、明らかに。しかし、この国の司法はそう判断するのですよ。かつて、村はずれの寡婦が魔女として焼かれた時代があったことはご存知でしょう？　そうした無辜の犠牲者を出さないために、この国の警察は厳格な鎖に縛られているのですよ。……少々過剰なほどに」

他のキリスト教諸国と同様、ルギニアでは魔術師は焚刑に処され、また魔術師でない者も無実の罪で屍を重ねてきた。

だが一方で、ヨーロッパよりもいっそう過酷な環境は、歴代の王侯達も民衆も、魔術の力を借りざるを得ないという奇妙な関係を構築した。迫害から魔術師や魔女を守るために定められた様々な法と命令は、近代を経ても一部で残り続け、また国民の血に気質として溶け込んでいる。すなわちそれが、「魔術師たちのカナン」をつくりあげたのだ。

しかし、何者かの特権を認めることは、同時に他の者に負債を負わせることとなる。

クラウチクが話す通り、ルギニア国内の警察組織が魔術による犯罪を立証できることは――どのような魔術を使っていようと――稀であり、現行犯や、動物虐待などといった魔術に付随する犯罪でないと身柄の拘束ができないという弊害があった。そして、反社会的組織がこぞって魔術師を雇う理由もこの点にある。

「だったら、どうすればいいのよ!?　息子が殺されたのに、泣き寝入りしろっていうの!?」

「魔術師だからと言って、我々は捜査の手を止めるわけではありません。たとえ望みが薄くとも、犯人とその指示役の逮捕へ繋がる糸口を探し続けます」

クラウチクにとって、それは紛れもない本心であった。

しかし、母親が抱く不信を払拭することは出来ないようだ。

「当然よ！　手を抜くなんて、あり得ないわ！」

そう、当然だ。しかし、[警察《自分たち》が力不足であることに変わりはない――クラウチクは下唇を噛んだ。

「先ほどの話はあくまで私の憶測であり、この事件が魔術によるものと決まったわけではありません。しかし――」まるで自分が、市民をたらい回しにする官庁の職員であるかのようだと感じた。同じ公僕ではあったが。「国内には、魔術による違法行為を調査する特権を持った組織がいくつか存在します。例えば“ルドルフ文化人類学諮問院”などが有名ですが――」

「あとは、私達とかですね」

いつの間にか、母親の傍らに少女が立っていた。特徴的な黒衣は、彼女が世俗とは異なる世界に属することを示している。中でも、この身の丈を超えるほど巨大なトランクケースを担いだ彼女の名を、クラウチクは知っていた。

「こんにちは。事件について協力してほしいんですけど、お取り込み中でしたか？」

「……降下教会」

クラウチクはひときわ低い声で、眼の前の少女――メリーの所属を、「特権組織の一つ」の名前を口にした。

†